

海の詩

文學士

小原無統譯

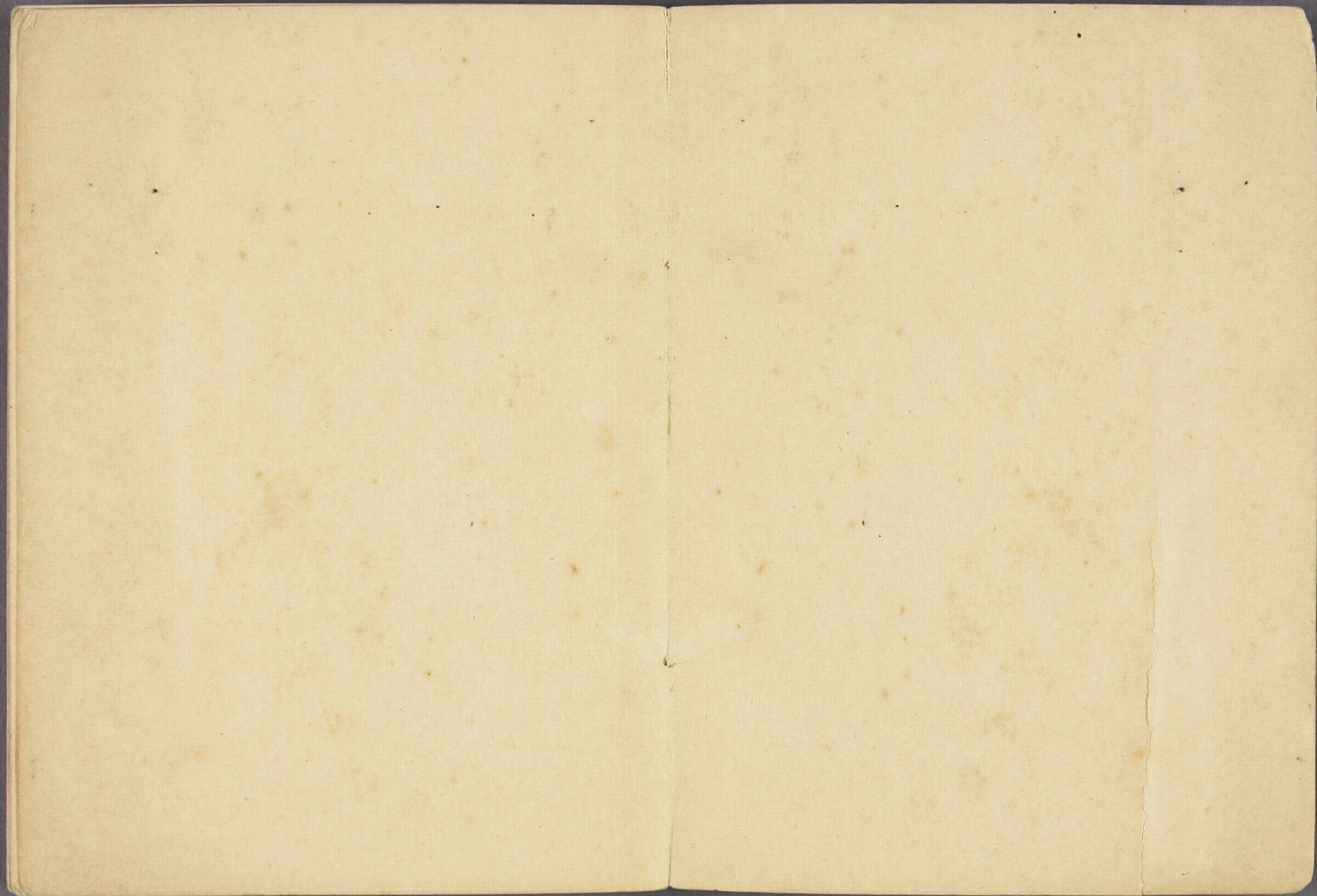


海の詩

文學士小原無絃譯



東京
文陽堂發行





文學士 小原無絃譯

海の詩

東京 文陽堂發行



表紙及挿繪が畫家ならぬ親友笠原
檜郎君の彩管に成れるを光榮とす

序

予の生國は丹波なり。丹波は語原溪波たにばなりといふ。波の字たゞ縁あれども實は海に接せざる栗に名高き山國なり。然れば予が幼時に於ては海に接するの機會乏しく、海に關する智識極めて貧し。さはれ寒國の人反つて暖國をなつかしむが如く山の子必ずしも海を愛せずといふを得ざらん。なほわが神話に於ける山佐知やまのさち毘古ひこが海を見まく欲して乞うてその佐知さちを替へたる情にも似たらんか。

予十四の春、祖父に伴はれて、津の國敏馬みめの濱に遊び

たる、これ生れて海を見たるの最初なりき。爾來、多しと
 にはあらねど海に接せしこと數々、ある時は由良海峽
 に舟を泛べて千鳥の浮寐に波の囁きを聞き、ある時は
 伊勢の海より船を出して東に漂よひつゝ、赤人が昔を
 懐びある時は由井ヶ濱に貝をあさりつゝ、幼兒のごと波
 に戯れある時は葉山の濱邊に潮浴しほあみして、遊びに負けて
 友に鼻高うせられある時は相摸灣の濤を蹴つて快哉
 をさげび、ある時は新井か岬の盤噴岩に天の妙巧を讚
 美し、ある時は熱海の海樓に朝暎を仰ぎ、ある時は江の
 島に遊びて白扇の逆に映する富士の高嶺を水中に愛
 で、ある時は日金山十國峠に攀ちて太平洋の天に連れ

る所、水天髣髴青一髮の實景を眺めある時は三島の海
 に舟を浮べて、日光波に金鱗を碎く所、かの王維が「魚眼
 波をぬて紅なり」の句の實を味ひたることもありき。か
 くて予は、海を愛し、海を讚美するの人となれり。
 予や、素より北海の荒瀾は知らず、況んや支海の怒濤
 をや。また況んや黄紅海の波色をや。されど、友に、旭濤氏
 あり、綠鷗氏あり、矯風氏あり、旭濤氏は東北海の濤の子
 なり、綠鷗氏は土佐の人、亦太平洋の波の子なり、矯風子
 は殊に海とは縁多き人、日本海岸、東海岸に住むこと久
 うして今は長崎平戸嶋に職を奉ず、これらの友が予に
 語り、予に教ふる所は、悉な海に關してなり、海外にある

の諸友亦常に海を通じて予に手簡を寄す、かくて予は、海の大と、海の快と、海の美について多くのものを想像するを得たり。

予、古史を讀む毎に、常に我が祖先の海洋的雄圖を想見し、更に方今、世界の趨勢に鑑み、四面海なる我が帝國の運命、かゝりて海にあるを思ふや切なり、曾て海軍中將肝付兼行氏を訪うて、氏が得意の海事談を聞くに及んで、我が國民教育上海事思想の鼓吹より急なるはなきを確信しぬ。氏の詠に曰く、打ち碎け碎けてはまた寄せかへす波にあらはん國民の魂」と。氏の抱負や洵に可し、予も亦大に此の思想の鼓吹に勉めんことを約しぬ。

予、先年、托せられて、普通教育上に用うべき唱歌の撰擇をなしたる事ありしが、その海に関する歌詞の殆どとるべきものなきを見て頗る遺憾に思ひ、爾後、詩人と相語るごとに海の大をうたひ、濤の譜を譯せんことを以てせり。

頃日、畏友小原無絃君、來つて予に示すに、海の譯詩一卷を以てせらる、繙き見るに、泰西詩界の明星が心魂をこめたる海の詩三十有餘篇、殆ど諸名家の作を網羅せるの觀あり、譯筆亦流麗、眞に歌ふべく誦すべきものあり、予、欣然として曰く、これなり、これなり、予が年來の宿志君によつて酬はれたるの感あり。乃ち、我が祖先の海

の賦の一節を記して以て序に代ふ。

『……天照大御神の大前に白さく、皇大神の見霽かしま
す四方の國は天の壁立つ極み國の退き立つ限り青雲
の靄びく極み白雲の墜居向伏す限り青海原は棹楫干
さす舟の體の至り留まらん極み大海に舟滿ち續けて
……狭き國は廣く峻しき國は平らげく、遠國は八十綱
うちかけて引寄することの如く皇大神の寄し奉らば
荷前をば横山の如く打積みおきて残りなば平らげく
聞こしめさん……』

明治三十九年如月の末東都駒込の里にて

下中芳岳

海の詩目次

眞珠は海に	バイネ	一
舟子の歌	作者不詳	三
ひとり晴れたる	井クニ	八
ローヤル、ジョーシ號の沈没	グーパー	一一
姉上よ	カーメンター	一七
暴風	作者不詳	二二
カザビアンカ	ヒーマンス夫人	二六

へスエラス號の難破	ロングフェロー	三二
のたうつ浪の	ストツダード	四四
歌	ミラト	四六
流人	フールド	五一
のぞみとなみ	レツケルト	五四
お、鞠子	キングスレー	五六
飛び散れよ	テニソン卿	六〇
アンナベル、リ	ボ	六三
海	コールリツヂ	六八
爾等英國の水兵	カメル	七七

海愁	シェークスピア	八二
漁夫	ゲーテ	八四
三人の漁夫	キングスレー	八八
水鳥に與ふ	プライアント	九一
海邊の回想	ムーア	九六
少女よわれと	ムーア	九八
さらば故郷	パイロン卿	一〇二
少女のなげき	シルレル	一一一
海邊の戀人	スキンプトン	一二五
駈落	シエレー	一二〇

磯貝の歌

海鷗

子ーブルス灣

夜と朝

海のはて

アブザイ夫人……………一二九

アラウニング夫人……………一三二

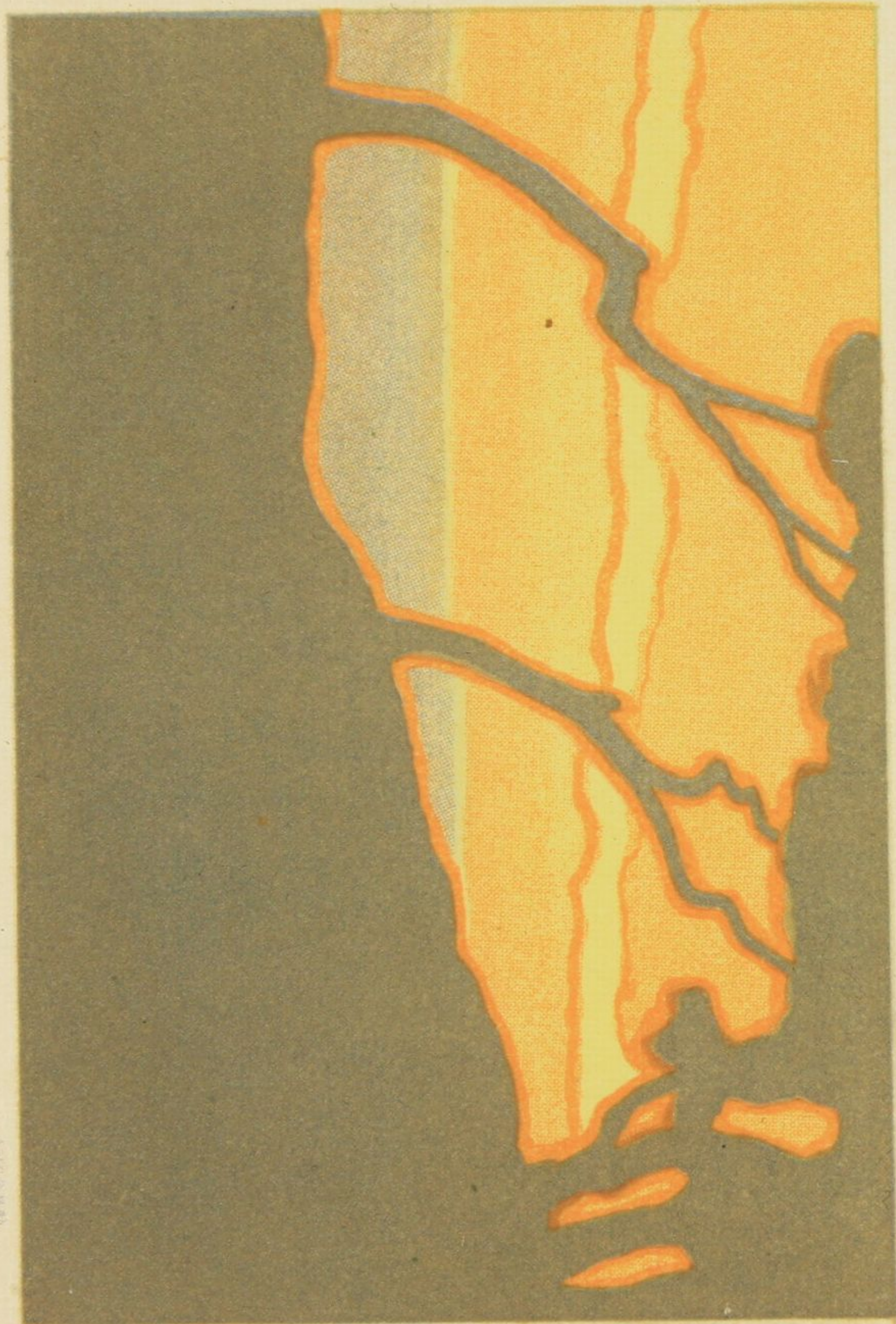
シエレト……………一三九

アラウニング……………一四四

ロセツチ……………一四七



海の詩目次 完



三三三

海の詩目次 完

海
の
詩
目
次

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

海
の
詩
目
次
完

眞珠は海に

眞また珠まは海に、

星は御空に。

さもわれ戀は

わが胸、胸に。

海天ひろし。

胸いやひろし。

眞珠、星より

戀ぞいや照る。

わはれ、少女よ、

來よ、ひろ胸に。

胸、海、天も

戀に融け和ふ。

——ハイ子——

舟子の歌

慕月歌 (十四歳の童女の作れる)

わはれ、海、海

わが戀ふる場

波青く、さら、かや。

磯に碎くる

波の音好く、

寄するさへいと嬉し。

あはれ浪好し、

大海原の

災厄にしばも會ひ、

貝と珊瑚の

墓にねむれる

いさましの舟人も好し。

夜ふけて月の

和つ光りの

汐泡に笑むも妙、

千々の煌星

遠きらめいて

水面より上るめり。

眞晝の照りに、

あはれ廣海

さらへかや華やかや。

朝の光りに、

生命、活動を

充ち満て、輝くよ。

暴風、荒海を

わたり、ゆるがし

大濤のさはぐとき、

わが言ひも得ず

思ひみだるゝ

わらがひを意ともせず。

生の旅はてぬ、

和田の荒胸

舟を行ることもなし、

愛の港に

錨おろして

やすらはな、舟行る子。

ひとり、晴れたる

ひとり、晴れたる海の面に來よ、

おゝ、ほだしなき美し女よ、

家をもすてゝ、友をもすてゝ、

たゞわれとのみ、われとのみ。

青波の面にわが舟うかぶ。

見よ、妖しげのものも有つ

小旗、帆柱、龍骨や。

そはたゞ、小さき貝の葉なれど

われは王なり。

地は奴隸につくられたりき、

おゝ、ほだしなき少女子よ、

さはれ、忠實なる雄々しの人に

はてしも知らぬ海のある。

流るゝ波の囁くものは

波ならざれば知りも得ぬ

秘の呪文のひとつの神秘、
生命の愛のみかは、あはれ、

自由の神秘。

——井グニ——

北吹く風にまかせつゝ、

たのしたのしく舟ぞ行く、

さま、朝空を射る雲雀。

さま、夏海を射る鵝鳥。

——スコットたのしき舟——

ローヤル、ジョージ號 の沈没

ローヤル、ジョージ號は砲一百を裝載せし英國の戦艦なり。一千七百八十二年八月二十九日スピットヘッドに碇泊中、俄然艦体の傾斜すると共に海底深く沈没しぬ。此災禍に死したる者八百、指令官提督ケムハンフェルト艦室にありて筆を執りてありしも、亦此不時の難に循ぜり。

あと弔とらひの鐘をうて、

とはに勇者のかへらんや。

祖國の濱にいと近き

海底ふかく沈みたり。

かぎりの勇氣示したる

勇者八百うちこぞり

覆りたるその艦ぶねと

横ざまにこそ倒れけれ。

陸風くがち帆索ほづなをゆるがしつ、

艦ぶねは腹をばわほむけぬ。

全艦員ともろともに

ローヤルジョージ沈みたり。

あと弔とらひの鐘をうて、

ケンペンフェルト逝きにけり。

最後海戦はたゝかはれ、

光榮はえのいさははなされたり。

そは戦鬪たたかひのうちならず、

風つよかりし爲めならず、

致命の漏口あなをえしならず、

岩に觸れたる爲めならず。

劍つるぎは鞘さやのうちなりき、

指には筆をもちながら、

麾下八百ともろともに

ケンペンフェルト沈みけり。

敵あだのわなゝき、恐れてし

わはれ、艦ふねをば引き揚げよ。

英國の負ふ涙をば

手のさかづきに混まじへよや。

艦材ふねはすべてなほ堅し、

ふたゝび艦ふねの浮きもせば

わがいかづちを装載つみこみて

遠海原を駛行はせんとも。

ケンペンフェルト逝きにけり、

その勝利は果てにけり。

麾下八百もいづくんぞ

また海駛行ることあらむ。

——クーパー——

あした、希望に燃え立ちつ、

沸くや港の浪きりて

船にいたりつ、綱とりて

かの明星にうそぶきぬ。

——テニソン卿舟子——

姉上よ

ポール

姉上よ、何あら浪は

永き日のひねもす言ふや、

遊びつゝ、低くさびしき

歌をこそとはに聞くなれ。

たゞ海の邊のみにあらず、

ひいくなり、あらく長閑に。

夜くらく、さびしきときも
夢にしてわれとあるかな。

フロレンス

かとうとよ、歌ふは聞かず、
あはれ、そは荒るゝ海のみ、
とはにその淋しき道は
大海の洞窟越えてぞ翔る。
あはれ、そは磯曲に寄せて
碎け散る水の音のみ、

波の音もて草木なき

荒野よりきたる風のみ。

ポール

さはあれど、波はおなじき
かなしげのものを言ふめり、
巨濤は何うたふやと
想へども甲斐なや、努力。
とこしへに夜また晝と
くりかへすその聲なにぞ。

したしみの挨拶なりや、
呼び招くいましめなりや。

フロレンス

おとうとよ、内地の山も
聲と音をもたでやはある。
こぼれ散る泉も地に
滴たりてもものや言はざる。
垂れ籠めのいとわたゝかき
家居なる圍爐裡べにても

いと遠き暴風の音は
まじらずや、われらの聲と。

ポール

さはあれど、ひとり心に
偉大なるものこそ語れ。
おほいなる神の御聲は
さかんなる調にひそむ。

暴風

人みな船室へやにうち群むれつ、

誰かはあえて眠り得む。

波を枕よの夜はふけて

あらしは海に狂ひけり。

おそろしきかな、冬にして

はやちに船を吹き捲まかれ、

『マストを伐きれ。』と合圖して

喇叭といろきわたるとき。

皆もの言はず、をのゝきつ、

屈強つよきも呼吸いきをひそめたり。

怒れる海はたゞどよみ、

今はと濤のくだけつゝ、

かくこそ闇に坐りつゝ、

皆いそがしう祈禱いのるとき、
階はしをよるめく船長ふなをさは

『これまでなり。』と叫びたり。

さはれ少女をとめは氷なす

父の手を執り囁ささやきぬ。

『陸くがに御神みかみのあるがごと

大海わだにもなとかまさゝらむ。』

われら少女をとめに接吻くちづけて

皆うれしげに物言ひつ。
朝うらくくと晴れしとき

やすく港とまりに泊りけり。

——作者不詳——

風音高く吹かば吹け、

いなづま儘まに照らば照れ——

うつろの艇ふねぞわが宮居みやゐ。

大海原ぞわが領りやうよ。

——カンニング公の清風——

カザビアンカ

カザビアンカは纒に十歳の小童、
 一千七百九十八年八月一日二日
 にわたりし海戦に参加したる佛
 蘭西分艦隊旗艦オリエント號艦
 長の子なり。

人ことごとく遁れ去りしに
 燃ゆる甲板に兒のみ立てり。

いくさの惨害を見する焔は
 死骸こえて兒を照らしぬ。

暴風治らすと生れし如く

きらびやかにも美々しう立てり。

益良健夫の血を享けたれば

童めけどもすがた天晴。

焔寄すれど——父の御言葉

なくば退かじと兒ぞ思へる。

父は死するに垂なんなんたれば

なぞその聲を聞きわけえんや。

兒ちとは叫びぬ——『父よ、告げませ、

わが事いまだ果てはせずや。』と。

長ながなる父はその子の上を

知らず伏せしと知るよしもなく。

またも叫びぬ『父よ、告げませ、

われなほ未だ去りも得ずや。』と。

されど答は彈丸たまのといるき、

焔ほのほははやもせまり來りぬ。

兒ちとは額に、波うつ髪に

焔ほのほの火氣ほけを覺えながらも

ひとり死地より見渡す姿、

今はと知れど動かす、雄々し。

これに限りと叫びも高ら、

『わが父、われは停とどまるべきや。』

言ふ間もあらず、帆も、とも綱も
 火道となりて身邊に熾りぬ。

あら華やかに艦をつゝみし

火は檣頭の旗をも焼きて

空にひらめく幟さながら

雄々しき兒の上に流れぬ。

あはや、霹靂鳴りとゞろきぬ――

かの兒、あはれ、何處にありし。

海に亂れし破片をさそひ、

遠く吹き去る風に問へよや

檣、舵に、うるはし旗に、

皆もちばをば能く守りしを――

死にしが中に殊に尊きは

をさなく、忠實のみさをなりけり。

――ヒーマンス夫人――

ヘスペラス號の難破

冬の荒海すゝみ行く

船あり、帆船ヘスペラス。

その船長はまなごなる

小さな女兒をともなひぬ。

眼は亞麻花よりも青くして、

頬はあけぼの、紅を帯び、

胸乳は皐月山楂子の

薫る花よりいや白し。

かの船長は舵機のへに

煙管くはへて凭り添ひつ、

西に、南にはや風の

吹き去る煙り見守りぬ。

西班牙洋を乗りしてふ

老いたる水夫ぞ語りける――

『はやて起るのおそれあり、
ちかき港に入りたまへ。』

『昨夜月の輪は黄金なし』

今宵御空に月はなし。』

あざみ顔にも船長は

煙りを吹いてほゝゑみぬ。

北東より吹ききたる

風いや強く、いや寒し。

雪さへ海にみだれつゝ、

浪沸きかへり荒れ立ちぬ。

しけは来りぬ、沖とほく

船をば流し吹き捲きぬ。

船はゆらぎて物怖ぢし

駒さながらに停まりぬ。

『いざ来よ来よや、わが女兒』

さままでに震ふこと勿れ。

しけに會ひしも幾度か、

かゝる疾風はやちのなにかある。』

膚はださす風の強ければ

舟夫かこの上衣うはぎを着きせかけつ、

破やれし船具せんぐの綱なわさりて

子をばマストに結ゆひつけぬ。

『おゝ父上よ、鐘鳴るは

おゝ何事のありてかよ。』

『荒岩磯の霧鐘きりかねぞ。』

父は沖へと舵かぢとりぬ。

『おゝ父上よ、砲音たつとは

おゝ何事のありてかよ。』

『この荒海になやみたる

船たすけの救助たすけを呼ぶ音ぞ。』

『おゝ父上よ、こらめきは

かゝ何事のありてかよ。」

父は答へず凍りたる

亡骸のごとく身動がず。

うごかぬ舵機に身を寄せて

父は空をば仰ぎけり。

雪をかすめて照る灯影、

見つむる眼を射たりけり。

今やむすめは手を合せ、

救はれましと禱りつゝ、

ガリレの湖の浪をさへ

鎮むる神を念じたり。

夜半の眞闇をつんざきて

みぞれ吹雪をかきわけて

妖怪のごとくかの船は

暗礁をさして流れたり。

疾風のあひにをやみなく

陸くわより音ぞ來りける。

そは荒磯にうち寄する

濤のどよみのひびきのみ。

濤は船首へさきにおし寄せて

あえなく船はたゞよひつ、

波は船人かこをば甲板でっさより

氷柱つらのごとく捲き去りぬ。

羊の毛よりいや白う、

波靜かなる濱なれど、

怒れる牛の角のごと

岩は船腹はらをば貫つらぬきぬ。

氷にとぢし帆桁ほげたさへ

マストと共にうちゆらぎ、

瑠璃なす船は沈みたり。

あゝ、あゝ、濤のどよむかな。

しのゝめ、荒るゝ磯濱に

一人の海士はたゝずみて

浮ぶマストにすがりたる

美し少女を見たりけり。

汐は胸に凍りたり、

汐は眼をとざしたり。

波のまに／＼浮き沈む

海藻のむとき髪を見ぬ。

雪ふる夜半にへスベラス、

破れしさまはかくなりき。

神よ、暗礁のこの如き

死よりわれ等を救へかし。

—— ロングフェロー ——

日高く、潮も高きとき、

濱はしるこそたのしけれ、

波はわれ追ひ、——われ笑ふ。

誰かわがごと幸なりや。

—— 作者不詳海邊のモーナ ——

のたうつ浪の

のたうつ浪の磯曲さまよひ、

海原遠く見わたして

夢むはむかし、わが戀人を

乗せて去りし帆のきらめきよ。

船は印度の海を今航き、

眞夏の帯域に入りぬとも、

乙鳥のごと、北波に駕り

飛びや歸らむ、その思ひ。

風清ければわれをしとめて

泛びためらふ君ならじ。

急げ、さらずばわが墓立たむ、

いたみ悲む海の邊に。

歌

あはれ、われをば愛しむ

かの君などかためらへる、

瑠璃いろ波の底つ園、

歌吹く貝のそばにして。

底つ寒海にたゞひとり

珊瑚のあひになぞ待てる、

濱、わが足にもものうきに、

風、わが憂きに病ましきに。

薔薇編み込みし花環落ち、

髪はしほたれ、亂れたり、

蓋結衣うつろひて

白がねのいろ失せにけり。

瑠璃いろ波の底つ園、

歌吹く貝のそばにして、

蓋結衣うきゆひぎらもうつろへる

われをば君の今も待つ。

この世の棕櫚の森よりも

紅あかき珊瑚は美うまからめ、――

その涼蔭すずかげをなぞ君の

われ戀ふるとも見棄てんや。

あはれ五百重いほへの汐かけて

なつかしの母父の墓

あとにのこして約言かねごとちぬ、

とこしへ此處こゝに棲すまんとは。

遠海原のはてかけて、

黒眼くろまなこの妹いものなげくをも

のこして行きつ約言かねごとちぬ、

とこしへわれと棲すまんとは。

さばあひしよ青春の園よりも

紅き珊瑚ぞ好かるべき、

その涼蔭をなぞ君の

われ戀ふるとも見棄てんや。

——ミラー——

航^ゆけ、航^ゆけ、恐れなき舟よ——

むかへて風の吹くとても、

今去る岸ゆ暗く、憂^うき

濱邊に着^つくることやある。

——ムリア航^ゆけ航^ゆけ——

流人

夏去り來ればつばくらめ

いく海かけて翔^かるらむ、

歎^{なげ}きを風にたぐふれば

行^ないて汝^なが樹をおとなはむ、

追^{おひ}風にいそぐ船は汝^なが

港々にいたるらむ、

さはれ、悲しや、英吉利を

また見るすべはあらぬ哉。

泣く人すくなからずとも、

遠く去り行く人を戀ひ、

行く人を戀ひ、戀し女よ、

落す涙をしぬびつゝ、

泣くなる人はたゞひとり。

ともに苦痛を知らぬなり、

隔つるに死のありとても、

たゞ和田津海のありとても、

白雲、海のはてにして

崩れみだるゝことあらば

白き崖をば思ひ出で

君が身をこそ夢に見れ、

雲その羽をうち張りて

青き御空を飛びかける。

天ならずして戀し女よ、

またの逢瀬はあらぬかな。

のぞみとなみ

希望^{のぞみ}、希望^{のぞみ}と胸より去れど、
心はとはに希望^{のぞみ}みて已まず。
波また波と磯に散れども、
海はかはらず永久^{とこしへ}深し。

小やみだになく濤荒立つは

荒海原のまことの生命^{いのち}。

日ごとくくのぼる希望^{のぞみ}は
心みだれの波のあらゝぎ。

——レツケルト——

われ、夕海のへを迷ひ、
さても奇^{あや}しき夢を見ぬ、
磯うつ浪はたゞ言ひぬ、
『夢見る人よ夢な見そ』。

——カーチス満干——

お、鞠子

「お、鞠子、行いて牛をば追ひ歸れ、

牛追ひ歸れ、

牛追ひ歸れ、

デーの眞砂の濱づたひ。』

西風にしあれて汐煙しをもふくめるに

鞠子はひとり出で行きぬ。

のたうつや汐は濱邊をうち洗ひ、

濱邊を越えつ、

濱邊をめぐり、

見渡すかざりはるごとと。

うば玉の霧は陸かをもとち籠こめつ—

鞠子は歸り來こざりけり。

「お、魚か、藻屑しか、浮ける髪かの毛か、

おぼれ少女せうにょの

黄金の髪か、

いれたる網にかゝりしは、

なぞデーの棧の間に寄る鮭もさは

たへの光をはなたんや、

少女をば海士とりあげて荒浪を、

のたくる浪を、

飢ゑたる浪を、

漕いで海邊に墓立てぬ、

今も舟人牛追ひ歸る聲を聞く、

デーの真砂の濱づたひ。

——キングスレー——

人とは何ぞ、語れかし——

神の知らせる和田津海に

ひたる魂々。

片足水に、片足陸に、

磯はなれんと願ひつゝ、——

身はなきものと見はしつゝ、

「大海」をおそれて依りもえぬ——

さるぞ人なる。

——クランチの大海——

飛び散れよ

飛び散れよ、あはれ海、

灰ほこいる寒き岩のうへ。

胸にわく思ひをば

わが舌した語り得てましや。

あはれ善よし海士あまの子は

妹いもと戯たはれつ、叫ぶかな。

あはれ善よし舟人かこの子は

舟を入江に歌ふかな。

大船は丘下の

港をさして進めども、

巻きし手も今はなく

かなしや、聲も今はなし。

飛び散れよ、あはれ海、

こやしき崖きしの下にして。

ありし日のやさ姿すがた

かへり來こぬこそ恨みなれ。

——テニソン卿——

大海原よ、とことばに

かはらす爾なれは鳴りどよむ。

ふりし岩をば轟とろろかす

いかづち孰たれか馴し得む。

——ヒーマンス夫人海の音——

こゝしき崖きしの下にして

ありし日のやさ姿すがた

かへり來ぬこそ恨みなれ

大海原ことことはに

かはらす浪は鳴りどよむ

ふりし岩をば轟とやろかす

いかづち孰なれか馴し得む

——ヒトマンス夫人海の音——



アンナベル、リー

海の邊ほとりの王國にて

いとくく古き昔のこと。

アンナベル、リーとし言は

君等も知れらん一人の少女をとめ住みけり。

この少女をとめ戀ひ戀はるゝより

ほかの思ひとてはなく住みけり。

海の邊ほとりのこの王國にて

われも妹いもも童兒わらはこなりき。

さはれ、われとアンナベル、リーとの仲は

戀と云ふにも超えて戀ひ戀ひぬ——

羽ある天人たちも

妹いもとわれとを羨みしばかりに戀ひぬ。

これぞ海の邊ほとりのこの王國にて

そのかみ天雲より

わが美しきアンナベル、リーを

冷したる風吹きしことはりなる。

さればその生うまれ尊き縁者來りて

われより妹を取り去り、

海の邊ほとりのこの王國なる

塚の裡に閉ぢ籠めぬ。

御空にしてなほその幸半さいちばならざる天使は

妹いもとわれとを嫉ねたみて行きぬ。

さりや、さればぞ人みなひとの知れる如く

海の邊ほとりのこの王國にて

夜ごと雲より風來りて

わがアンナベル、リーを冷し殺したるなる。

さはれ、二人の戀、そは

いや年とりたる人々の戀よりも

いや遙かに賢き人皆の戀よりもいや遙かに強
かりき。

天つ御空の天使たちも

海底の悪魔ども、

美しきアンナベル、リーの魂より

わが魂を裂き離すこと能はじ。

まこと、月輝けばわれ美しき

アンナベル、リーを夢まざることなく、

星のぼれば美しきアンナベル、リーの

匂ひやかなる眼を覚えざることなし。

さればこそ、海ほとりの邊ほとりのその塚なる、

鳴りひびく海ほとりの邊ほとりのその墓なる

わが戀人、わが戀人、わが生命いのち、わが花嫁の
傍に夜もすがらわれ臥して眠るなれ。

海（老水夫より）

わはれ、睡眠よ、極より極の

人みな愛づるやさしきものよ。

聖母マリアをいざ讃へなん。

天より降るやさしき睡眠。

わが魂ふかく忍び入りたり。

甲板にながく打ち棄て置かれ、

ありし甲斐なき破れ手桶に

露充ちたりとわれ夢に見つ。

覺めたるときは雨降りたりき。

唇うるひ、喉さむかりき。

衣はすべて濡れぞそぼちし。

げに夢ながらわれ飲みけらし、

今もわが身はなほ飲めるなり。

動くも手足あるを覺えず、

いと輕きに——われはほとく、

眠りながらに玉の緒絶えて

天の精靈となりしと思ひぬ。

たちまち咆る風を聞きたり。

風は遙かに吹きわたるなり。

さもあれ、薄き乾きゝりたる

帆をはたくとうち震はしぬ。

仰げば空のあら目覺ましや。

もゝの火の旗光りきらめき、

彼方此方かなたこなたにかけめぐりつゝ、

彼方此方かなたこなたに、うち又ほかに

蒼き煌星きらほしゆらゝと舞ひぬ。

吹き來る風はいよゝ咆りて

帆の鳴る音は楔くさびに似たり。

黒き雲より雨ふりそゝぎ、
月こそ高く雲の端はにあれ。

厚く眞黒き雲は裂けしも、
月こそ高く雲の端はにあれ。
絶壁きりぎし落つる水さながらに
眞直まっすぐさまに射るやいなすま、
荒れ立つひろき川をばなして。

*
*
*
*
*
*

そよ風清く吹きわたり、
泡沫しほなほしろくほとばしり、
うねなす波の痕あとながし。
その静かなる海原に
われ等はじめて乗り入れぬ。

そよ風落ちぬ。帆も落ちぬ。
あゝ、悲しさのきはみかな。
ひとりわれ等のうち語り。
海の沈黙しちもくをやぶるのみ。

見渡すかぎり赤銅あかがねの
燃ゆるが如き大空に
血汐色ひるなす午ひるの日の
大さ月にも似たらむが
マストの上に懸りたり。

かくて日數をかさぬるも、
われ等息吹いぶかず身動みじろがず、
さりや描えがける海原の

描えがける船にさも似たり。

何處いどこを見るも水ばかり。
船人みなはをのゝきぬ。
何處いどこを見るも水ばかり。
さはれ飲しづくまるゝ雫しづくなし。

*
*
*
*
*
*

——コールリツヂ——

爾等英國の水兵

祖國の海の守りなる
 爾等英國の水兵よ、
 爾等が御旗はたたかひに、
 はた、微風に空高く
 そびえ誇りて一千年。
 ほまれは高さ爾等が旗、

敵を撃たんと繚へり
 蒼溟を掃うて進むなり。
 風起ち狂ひ吹くとても。
 戦喊高く長うして
 風起ち狂ひ吹くとても。
 爾等が父祖のたましひは
 波の穂ごとにこもれりな。
 あはれ、甲板は譽れの野、
 大海原は墓なりき。

そこに斃れぬブレイクも、
 鬼神の如きネルソンも。
 蒼溟を掃うて進むとき、
 爾等が雄心燃え立たむ。
 風起ち狂ひ吹くとても、
 戦喊高く長うして
 風起ち狂ひ吹くとても。
 嶮をかたむる城廓も

大英國にえうはなし、
 山なす波をうち越えて
 行くぞわれ等の進路なる。
 蒼溟の上こそ家居なれ。
 大濤岸に吼ゆるとも
 いくさぶねより鯨波あげて
 吼ゆる大濤鎮むなり。
 風起ち狂ひ吹くとても、
 戦喊高く長うして
 風起ち狂ひ吹くとても。

戦雲惨たる夜の去りて
 平和の星のかへるまで、
 御旗は高く大空に
 流星のごと燃え立たむ。
 われ等の歌と美酒は
 爾等が譽れに酬いんと
 御國に溢れ流るべし。
 狂へる風も吹きやまむ。
 鐵火のひいきをさまらむ。

——カメル——

狂へる風も吹きやまむ。

海の邊にそびゆる城を、
 その城をわれは看たりき、
 その上に月は懸りつ
 四邊あたりをば霧ぞ籠こめたる。

——ウーランド海邊の城——

海愁

底いつひろに父はあり。

骨は珊瑚となりにけり。

眼まなこは眞珠となりにけり。

何も消えしはあらねども

海の變化うつりにともなうて

ゆたに奇くすしきものとなる。

海姫とくに鐘をうつ。

聽け、今聲の聞こゆなり——

鐘ヂン、ドンと。

——シエークスピア——

細漣さいなみかるく舟をうつ。

出せよ——風に任まかせかし。

舟は矢なしぬ——皆のりぬ。

返り見すれば岸遠し。

——ダナ快樂舟——

漁夫

水逆卷さかまきぬ——水荒立あまちぬ、
 岸あしにひとりの漁夫あまぞ坐りし。
 心ひやゝに。夢かの眼して
 釣の糸をば見守りたりき。
 しばし夢かの見守りせるに
 たちまち波は二つに分れ、

大海原のふかき底より

水少女みづをとめこそ浮び出でけれ。

少女歌をとめひつ少女語をとめりつ——

人の手藝わざもて、人の知恵もて

心を籠こめの死ぬばかりにも

汝なれいかなればわが子惑はす。

あゝ、海底に平安やすき生涯よさしを

いかにわれ等の送ると知らば

地つちをば棄てゝ、汝なれも飛び入れ。

身もすこやかに長閑けからまし。

黄金まばゆく日照らざらんや。

海の底にも月はあるなり。

その休處よりいや美しう

日もはた月も昇らざらんや。

青波底の清くも深き

天は汝をば惑はさいらむ——

しか麗はしの汝が姿は

久遠の露のうちに映らむ。

水逆卷さぬ——水荒立ちぬ、

水は素足にうちぞ寄せたる。

その戀し女のしのび寄れるに

むすべる胸も搏つを覚えぬ。

少女語りぬ、少女歌ひぬ、

しばし支へし力も失せつ。

少女も曳きつ、男も落ちつ、

沈みてとはに浮ばざりけり。

三人の漁夫

三人の漁夫は入る日と共に、
 西へと遠く、西へと遠く
 漕ぎ出でつゝも戀しき妻に
 心のこしつ、いとしの子等は
 町はづれまで見送り行きぬ。
 男はかせぎ、妻は泣けども

獲物はまれに家族は多し、
 磯拍つ浪の音のみたかく。

三人の妻は燈臺にのぼり、
 入る日と共に燈火をつけぬ。
 三人の妻は嵐に憂ひ、
 三人の妻は雨に患ひぬ。
 一夜黒雲おどろに飛びぬ。
 男はかせぎ、妻は泣けども、
 忽ち、風に和田津海荒れて

磯拍つ浪の音のみたかく。

汐引きしとき朝の光りに
輝やく濱に三人の亡骸。

ふたゝび町の家にかへらぬ

三人の漁夫の亡骸めぐりて

手をと리카はし泣きに泣くなり。

男はかせぎ妻は泣けども、

過ぐれば疾し、疾く眠らむ。

さらばよ、磯よ、磯拍つ浪よ。

— キングスレー —

水鳥に與ふ

露はや落ちて、山の端に

入る日の光照りかへす薔薇色ふかき

空遠くさびしき天路翔けりつゝ

そも何處にか汝れは行く。

くれなる深き大空に

黒く浮びて飛び過ぐる汝が姿を
射とめんと、獵夫が遠く眼を放ち、
見守るとても甲斐なけむ。

汝が行衛はそも何處、

水ひたくと岸涵す浮藻しげれる
みづらみか、河のみぎはか、荒濤の
逆捲き寄する海ぎはか。

あはれ「力」はかしこくも

路をさとせば、荒磯の途はなくとも、
はてしなきすすさめる空をたよりなく
飛びさまよへと迷ひせじ。

汝は日ねもす、羽ばたきて

寒けく薄き大氣のはてを翔けりて
倦みもせず、日暮れて夜の近寄るも、
うれしや陸とかりもせず。

やがて勞苦も終るらむ、

夏の鳥宿を見いだして汝もやがては
友鳥と休み啼くらむ汝が巢を
包みて蘆もそよぐらむ。

汝去り行きつ天の淵

汝が姿を吞みたりきさもあれ汝が
與へたる訓はふかく胸に入り、
またたやすくは逝かざらむ。

はてなき空の極みより

極みにいたる汝が途示し給へる
神こそはひとりわが行く遠路をも
正しくおしへ給ふらむ。

—— プライアント ——

山の牧笛きこゆれど——
さゝめく木の音きこゆれど——
わが魂響りは黙したり。

—— わが青海は何處なる。

—— ヒーマンス夫人海何處 ——

海邊の回想

見よ、月影の微笑えみをうけ、

かのさゝ波のうち寄りて、

しばし泡立ち、きらめきつ、

やがてさゝめき消え失うする。

幸さいちとなやみの玩弄物おもちゃなる

人も「時」てふ事の海に

たゞ束つかの間の波をあげ、

やがて久遠くゑんに融けぞ去る。

——ムリア——

鳥は御空にひるがへり、
もの皆清く、麗うるはしや、
樂がの音ねなほも浮うき迷ふ、
航ゆくはわが舟。

—— 西班牙の調 ——

少女よわれと

少女をとめよ、われと

海越え行かむ、

照る日、吹く風、雪をも分わけて。

季ときはめぐるも、

忠實まじめなる心

とはにぞ燃ゆる、何處に行くも。

如何さだめに運命の移らば移れ、戀の二人の別れんや、
君あるところ生命なり、君なきところ死なりかし。

少女をとめよ、われと

海越え行かむ、

何處荒風吹くとも行かむ。

季ときはめぐるも

忠實まじめなる心

とはにぞ燃ゆる、何處に行くも。

自由の郷は

海にあらずや、

陸は禮儀と鎖の國ぞ、

われら奴隸も

波に泛ばい

戀と自在はわれらのものよ。

われら見守る眼もなく、われら傷ふ舌もなく、

なべての地は忘られて四方たゞ天にかこまれむ。

少女よ、われと

海越え行かむ、

照る日、吹く風、雪をも分けて。

季はめぐるも

忠實なる心

とはにぞ燃ゆる、何處に行くも。

——ムリア——

たのしみ、希望あらずして——

友どちとともあるかなし、

漁夫は見るなり、生きながら、

ひたも看るなり——その終

——コーンウォール漁夫——

さらば、故郷

さらば、さらば、故郷ふるさとの岸

青波路の彼方かなたに消えぞ失する。

夜風さいめき、碎波どよめき、

あらしき海鷗さけぶ。

彼方かなた海に入る日の

翔かひる路をわれ等こそたどれ。

幸さいきくあれ、しばし、彼よ、爾よ、

わが故郷ふるさとよ——おさらば。

たゞしばしの時ぞ、日は

朝の出生與へんとて昇るらむ。

いざ、大洋と御空とをことほぐも、

生れ故郷をことほがんや。

わが善き館は荒れはて、

その爐はさびたり。

野草壁上にしげからんとして、

わが犬門の邊に咆ゆ。

來よ、來よ、いはけなき扈從よ、

なんすれぞ泣き悲むや。

浪の荒るゝにおびえてか、

暴風にをのゝきてか。

とまれ、汝が眼の涙拂へよ。

われ等の船は疾くして強し。

われ等のいと疾き鷹も

かばかり嬉しくは飛びも得じぞ。

『風吹かば吹け、波立たば立て、

われ波、風をふそれじ。

チャイルドの君よ、わが心悲しきを

いぶかり給ふことなかれ。

父より戀しき母より

われ遠く去りて、

たゞ此處なる人々を除けば友とてはなきも、

さはれ、君と上天の神といますをや。

『父は心よりわが首途かどを祝ひしも

いたくは愁ひ悲まざりき。

たゞ母のみはわが還り來るまで

なげきを漏すなるべし。』

よし、よし、いはけなき子よ、

さる涙なれば流るともふさはし。

われとても汝なが罪なの胸なをもちなば

涙拂はんとはなさいるべし。

來よ、來よ、わが嚴格なる郷士よ、

なんすれぞさは蒼あをくなれるぞ。

佛蘭西の讐人に心おくしてか、

あらしに打ち震ひてか。

『命惜うてをのゝくと思ひ給ふや、

チャイルドの君よ、われさは弱からじ。

家なる妻の忠實まじめの頬の

青くなれらんを思へばのみよ。

『わが妻子は湖に臨める

君の御館に近う棲めるなり、

子等の父なるわれを呼ぶとき

妻はそも何とや答すらむ。』

よし、よし、わが善き郷士よ、

汝が悲愁は無理ならじ。

われは心軽き性なればこそ

笑ひながらも出で、行くなれ。

今し、われはまことに

廣き、廣き海の上に一人なり。

人ひとりわが爲めに歎かざらんとして、

などほか人の爲めに哀まざらんや。

他人に養はるゝかぎり

わが犬も甲斐なくや悲み鳴かん。

さはれ、わが還り來らざるにはやくも

われを見なば立どころに噛みや付くらん。

わが舟よ、爾と共に速かに

泡立つ大海原を分けて行かなん。

何處の國にわれを着くるともまゝぞ、

わが故郷にふたゝび還るを希はじ。

いざや、立て、立て、暗碧の波よ、

見放^{みさ}くれど汝^{なれ}は見えじ、

いざや、來^こよ、荒磯^{あらいそ}、洞窟^{ほら}よ。

わが故郷^{ふるさと}よ、——おさらば。

——バイロン卿——

少女のなげき

風は森をばゆるがしぬ、

雲は空をば閉ぢ籠^こめぬ。

少女^{をとめ}はひとり緑なる

なぎさの邊にぞ坐りける。

碎くる浪はいと強くうちこそ寄すれ。

夜の闇に少女^{をとめ}はなげきまじえつゝ、

眼まみは涙なみにいとあつし。

『地つちのこの世は荒野原、

わが腹はらわたは断つちにけり、

わが戀こひひ願ねがふ何物か

この娑婆しあばの世よの分わち得える。

むすめは天あまのその父ちちに今いまかへり行く。

娑婆しあばの世よの興きふる快うれ樂しわれ知しりぬ——

われは生いきたり——戀こひしたり。——

『甲斐かいなや、あはれ、甲斐かいもなや、

涙雨なみなしながるゝよ。

人の愁なみだは鈍にぶき死しの

重おもき耳みみをば覺さし得えじ。

何か、ゆかしの戀こひ亡なきを慰なぐさめ得えるか、

天あまなれや、われ御空みそらより汝なが胸むねに

かゝる油あぶらをそゝぎてむ。』

『甲斐かいあらずとも永とこ久しほに

涙雨なみなしながしてむ。

人の愁は鈍き死の

重き耳をば覺し得じ。

今もゆかしの戀なきを心いためど、

御空より戀の忠實なる涙なす

油は創にくだらじよ。』

——シルレル——

海邊の戀人

今日戀の國なるわれ等、

何處に往かむ。

戀し女よ、行くか、とまるか、

帆かけるか、さては漕がむか。

風さはにみち多くして

とこしへに五月晴れなり。

今日、戀の國なるわれ等、

何處に往かむ。

風は死を接吻みし愁ひ、

ありし快樂の

息吹のみ。

一房の薔薇を鎗重の

行くみちは神ぞしらせる、

戀ぞ知りたる。

今日、戀の國なるわれ等——

舟人は羽ある戀の子、

帆柱は鳩のくちばし、

甲板は黄金。

網は亡き少女の髪の毛、

たくはへはこゝらの美し

戀の征矢。

今日、戀の國なるわれ等——

ゆかし女よ、何處に上陸げむ。

見なれざる人行く野べか、
ふる里に近くの野べか。

火の花の咲ける處か、
雪の花はた泡の花

咲ける處か。

今日、戀の國なるわれ等——

妹は言ふ、上陸^ちげてよ、戀が
矢も鳩も、心はた手も
みなひとつ示す處に。

さる濱は、戀しき君よ、
男^をも向かず、女^めも上陸^ちがらざる
處にぞある。

——スフィンバイン——

碎くる浪は打ち寄せぬ、
こゝしき岩の荒磯に。

空の荒れにぞ、森の木は
もみに揉みける、巨^{おほ}枝^{えだ}を。

——ヒーマンス夫人巡禮——

駈落

一

浪立ちさはぎ、

霞たばしり、

稻妻ひかり、

白沫とほく

をどる哉。

旋風つむじはためき、

いかづち響き、

森うちゆらぎ、

寺の鐘鳴る――

いざ來れ。

この世さながら、動きつゝ、

船まきちらす海原か。

鳥、けもの、人、蛆は皆

雨風あらしをおそれ、這ひ伏しぬ——

いざ來れ。

二

『われ等の舟に帆はひとつ。』

舵手かきどもは青ざめぬ。

思ふに、たけき水先みづさきも

われ等のあとに附つき來くべし。』——

男おとこは呼びぬ。

女をんなは呼びぬ。『橈かいたてよ。

岸よりはやく漕こぎ出でよ。』

死の矢、忽ち亂れ落ち

霞まじりに海原の

行手けがしぬ。

小島、あらゝぎいはほより

雲、燈臺をとざしたり。

疾風はやちに音はあらねども、

大砲あかく風下かきしもに

光りきらめく。

三

『汝なれ恐るゝや、怖るゝや。

はた、汝なれ見るや、汝なれ聞くや。

荒れ立ち狂ふ海原を

われ等は漕ぎぞわづらへる、

われと汝なれとは。』

戀ひ、戀はれたる二人をば

舟の苦とまこそ掩ほひたれ。

かたみの血汐とけ合ひて

快樂けらくをほこり囁きし

音ねこそ低くけれ。

怒濤山なす海原は

小やみだになく荒れ狂ひ、

ひきては寄せて碎けつゝ、
沈みはてゝは散りみだれ、
みだれ散るかな。

四

城の廣間に青ざめし
乳母、さながらに、獵犬の
瘦せしが如く、そのそばに
立つ花聳ははぢしめを

恚れるさまや。

もの見櫓のいたゞきに
死を預表す魂のごと、
老いかたくなの父立てり、
荒るゝ天氣もその聲に
なれたる如し。

子をし呼ばへば荒立てる
言ひひてしを今もまた

狂ふ疾風はやちのうちながら、
愛めでいつくしむ女むすめ兒この

名をぞ呼ぶなる。

——シエレー——

ひとり巖にたゝずめば、
八重の汐路はわが前に
渺茫としてはてもなく、
忽ち銀白く、また鉛灰はひに、
光と雲はかはるゝ
ことなる色を面に投げぬ、

——ブルツクス海岸の日出——

磯貝の歌

われは大海より來りぬ、波わが身をうち越えて去りぬ、
海藻、きらゝの泡におほはれたるまゝ、

われ砂上に落ければ見なれぬ人直ちに拾ひ取りぬ、
程いと遠き家居いへの麗はしき殿飾らんとてなり。

美しいのマートル、薔薇などにとりまかれても、

なほもく、海底にあらむことを悲み、

胸なる低き聲はわが思ひを披いて

としへに海の音をさゝやくなり。

あした、雲雀は快樂の歌をそゝぎ、

ゆふべかなしげの夜鶯は歌をかなで、

殿なる琴は夜ごとたのしげの節を放ち、

美人の妙歌はかるく空にたゞよふ。

されども、われは身を上下せしめし波のどよみを戀ひ悲み、

ひたすら涼しき珊瑚の洞窟ほらに遁れ去らんことを思ふ。

賓客もしほしひまゝにわれを評價すれば

われ靜かなる海のひゞきして答ふるなり。

われ青海原を去りてより悲愁としへに絶えれども、

娑婆の人々とまじらひたれば彼等を知りぬ、

人々が一度いとほしみたる絆を忘れ去りて

しばも新しき友を信じ、新しき戀にまつはらんとす
るをも知りぬ。

あはれ、まことの執着を保つことのさばかり難かりや。

疑ふ衆生をしてわれより戒を求めしめよ、

われは神秘の絆にて大海に結びつけられぬ、

われに言葉とてなけれども海の音あるなり。

海鷗

あらたのしげの海鷗かもめかな、
 その夢こもる青波に
 舟乗り入れてたゞひとつ
 影をぞ前におとしける、
 (げに影をこそ人は追へ)

波にはなれて長閑のどかにも
 白き泡をば身となしつ、
 大海わだの胸にし胸つけて
 奇くしきゆらぎを會得えとくしつ、
 荒れ立つ海に浮きしづみ。
 その眼の光り譬ふれば
 大海わだと空とがその胸に
 點火つけ燃やしたる幸魂さいたまも
 稜威りやういのほどを會得えとくせんと

神はじめより與へざる。

青き波よりその白羽、

情なからねど、取り離し

縛れば——恐怖なき目して

あやしとやそと人を見ぬ、

大海の魔物と思ひしや。

大海の鳥をば草むらに

置けばあたりを見まはしぬ、

群れ寄る蜂にふるふ花、

ゆらぐや高き緑の木、

白がねなしておつる露。

さはれ、虹魚見し眼には

この世の花は青かりき。

この世の露のおちしとき

大海の飛沫を思ひ出で、

眼をかなしげに曇らしぬ。

あたり緑の木々はたゞ

牢屋ひとやと暗き蔭なしぬ。

鳥羽はを垂れてはて知らぬ

さらゝの海を戀ひいたみ――

みな消ゆるとは知らずして。

少女をとめたのしの顔よせて

大海わた戀ふるをば移さんと

聲やさしげにさゝやきつ、

人の愛をば教へしも

あやし、悲しと思ひがほ。

今は死なんと悲しみぬ、

(まづ海なせど波もなき

空を仰ぎぬ)あな、あはれ。

人の思ひを身に負ひつ、

人の思ひを苦悶なやみをも。

ネーブルス灣

日は暖かに、空晴れわたり、
 波きらりと疾く舞ひをどり、
 青島雪の消ぬ山かけて
 ひる、紫の光りたなびく。
 つち濕はへる息吹はかるく
 ふくらみ初めしその芽を繞る。

歡喜わかき聲さながらに
 風、鳥、八重の汐路のみかは、
 市の聲さへ幽かなるかな。
 足踏み入れぬ大海原に
 みどり、むらさき海草浮び、
 星融け降りし光の如く
 波、磯濱に寄せては碎く。
 ひとり真砂にわれ佇めば
 真晝の大海に射返る日ざし、

わがへに光り、拍子をかしく
立つ波音のゆかしきかなや、
誰か今わが快樂知らんや。

悲しやもたじ希望健康、

うちに平和ほかに恬静、

あはれ、聖者が黙思より得て

榮光のかむり胸にをさめし

かのたぐひなき心の満足——

名譽も、戀も、暇も、力も。

此等のうちにある人見れば——
生くるたのしと皆ほゝゑめど、
その酒杯はわれにふさはじ。

さはれ、只今、絶えし希望も

風波よりもいや穩かなり。

眠の如く死の來るまで

倦める兒のごと身を横へて、

うまれし者の堪へでかなはぬ

煩ひの生を泣きや過さむ。

氣はけぬるきも、わが頬は寒く、
 死なんとすなる額ぬか吹きはらふ
 海のさびしき音ねをぞ聞くなる。

はやくも老いしわが亡き心、
 今日けふのよき日の行くを望みて
 時ときじくなひひ泣きあざみ笑へば
 われを寒しと人や泣くらむ。
 燦たる晚暉ゆふひ入らむとするとき、
 こゝろに残る歡樂よろこびのこゝと

空にいざよふ今日けふの日に似ず——
 わが身を人の慈いづくしまねば——
 人や泣くらむ泣きやいたまむ。

——シエレー——

落つる日ひがその磯いその上に

懸かるときわれ行き見れば——

舟ふねはなほ其處そのところにありしも

波なみははやあらざりけりな。

——ムーア朝あさと夕ゆふ——

夜と朝

一

はひいろの海、くろき長陸。ながくが

大きく低く黄なる半月。

われ、船首へやきもて、小さちさく入江に

つと乗り入れて淡雪なせる

砂にとまれば睡いよりきらゝの
細輪ほろなし飛ぶさゝれさゝ波。

海の香ぬるき濱邊を一里。

野を三つ過ぎて畑こそ見ゆれ。

小片かけらにあてゝ疾とく鋭とく擦すれば

點ち火ちきたる燐ほ寸ちの青きさらめき、

二つの心しんの相搏あつよりも

低し、おそろし、うれしの聲す。

岬^{みさき}めぐれば海こそ來^きぬれ、
 日は山の端^はに見ゆるも高く、
 すゝむ黄金^{こがね}路^ぢひとすぢ直^{なほ}く、
 われには人の娑婆もえうなき。

—— プラウニング ——

海のはて

海なほざりの聲々聽けよ、

時そのものゝ音^ねこそすなれ——

地^ちそのものゝ殼^{から}のさゝやき、

とはに奇^くしきは海の極^{きま}みぞ、

眼を放つとも一里は見えじ、

時ありてよりこの響^{うら}こそ

時すぎ行くを語り継ぎけれ、

その幽寂は死のそれならず――

はかな競争をこらへ忍びて

ふりし人生の愁ひの聲よ。

休みては怒る娑婆の心か、

砂にぞ憂げの脈搏あなる。

空灰色のはては知られず、

海路にそうてたゞ杳々や。

ひとり海邊に耳傾けよ。

ひとり森間に耳傾けよ。

これら寂びたる二つの聲は

汝にはひとつ響なるべし。

群衆のさゝめき高まり沈み、

またも高まるあたりに聽けよ――

なほ波と樹とひとつ響ぞ。

磯に一葉の貝を拾ふて

その唇に耳をば寄せよ。

歎なげくはかなじ願望ねがひ、神秘しひよ、

大海原の言葉こたまよ。

人のこゝろのなぞ違ちがはんや、

皆汝みながごとし。娑婆しや、海、人は

その各々おのにすべて具そなはる。

——ロセツチ——

海の詩

完

明治三十九年四月十五日印刷
明治三十九年四月二十日發行

定價金參拾五錢

著作者 文學士 小原無絃

發行者 富田能次

印刷者 熊田宜遜



不許複製

海乃詩

東京市神田區美土代町三丁目一番地

發行元 文陽堂書店

2800

700

▲湯朝觀明君著	▲中應田露月君編	▲村應田露月君編	▲矢谷重芳君編	▲中應田露月君編	▲湯朝觀明君著
▲理	▲作	▲小	▲村	▲中	▲湯
▲想	▲詩	▲美	▲文	▲新	▲中
▲の	▲文	▲文	▲品	▲美	▲應
▲家	▲作	▲精	▲時	▲子	▲中
▲庭	▲文	▲選	▲文	▲文	▲應
▲法	▲法	▲法	▲文	▲文	▲中
▲庭	▲法	▲選	▲文	▲文	▲應
新形全一册	菊版全一册	新形全一册	新形全一册	新形全一册	新形全一册
定價二十五錢	定價四十五錢	定價二十五錢	並上製定價三十五錢	並上製定價三十五錢	並上製定價三十五錢

